

**外国人児童生徒との日常的接触が日本人児童生徒の
グローバルコンピテンスの開発に与える影響**
**The Influence of Daily Contact with Foreign Students on the Development of
Japanese Students' Global Competence**

奥西有理 (岡山理科大学) Yuri Okunishi (Okayama University of Science)

キーワード 異文化接触、外国人児童生徒、グローバルコンピテンス

1. 本研究の背景と目的

文部科学省 (2022) の公立小・中・高等学校を対象とした調査によると、令和3年付で日本語指導が必要な児童生徒は 58,353 人であり、その3年前に行われた前回調査から 14.1% の増加がみられているという。これらの児童生徒のうち外国籍保有者は 47,627 人、日本国籍保有者は 10,726 人で、それぞれ前回調査から 16.9% と 3.4% の増加となっている。移民政策は取っていないというのが政府の立場であるが、日本語を使用することができない子供たちの数の増加は、外国人の定住化と日本社会の益々の多文化化を予想させる。

近年、小・中・高等学校におけるグローバル人材育成推進のための外国語教育の推進や、新しい学力としてのグローバルコンピテンスの育成 (OECD, 2018) について前向きな議論が行われてきた。日本人のグローバルな能力の開発に関する議論は、地域に暮らす外国人児童生徒とは一線を画してきた。外国人児童生徒については不就学や異文化不適應といった問題性の報告が多くなされてきた (児島, 2007 他)。被支援者であり消極面が焦点化されがちであるが実際に身近で接触した日本人の子供たちにどのような影響があるのだろうか。

学校における異民族間の友情関係が外集団に対する否定的態度を減少させたとする報告は海外においてはみられるが、日本でマジョリティーであるホスト側の認知を扱った研究は僅かである。林原 (2011) は、日本人小学生の国際理解への関心に、どのような異文化接触経験が影響を及ぼすのかについて調査した。外国人親戚数や外国人教員数は影響を与えておらず、外国語教室体験や海外滞在期間は限定的に影響を与えていたが、外国人友人数は全ての国際理解関心の因子に肯定的影響を与えていたことが報告されている。量的調査だったため外国人の友人の出身国や交流の中身や関係について質的検証が必要であると考察されている。本研究では、在日外国人児童生徒と関わりをもつことは、日本人児童生徒のグローバルな力の開発につながると仮定した上で、質的調査によりその検証を試みる。

2. 方法

私立 A 大学の授業 B の受講者に対して、小・中・高等学校のいずれかの時期に外国人児童生徒と親しく関わりを持った経験があるかを尋ね、経験があると答えた者の中からインタビュー調査協力者を募ったところ 10 名が調査協力者となった。プライバシーについて確約し、2020 年 7 月～2021 年 2 月の期間に 1 人あたり 1 時間程度の半構造化面接を実施した。外国人児童生徒との関わり合いについてどのような出来事が印象に残っており、どのように感じていたか、どのような学びがあったと思うか等について当時を振り返りながらエピソードや考えを語ってもらった。協力者の概要は表 1 にまとめた。インタビューデータは逐語的に文字起こしをした。その語りテキストを熟読し、関わりを通してどのような変化があったのかについて事例ごとに解釈を行った。

3. 結果と考察

分析の結果、外国人児童生徒との関わりは、調査時に大学生となっていた日本人の異文化理解や国際志向性、人格形成といった面に対して様々な影響を与えていることが分かった。

表1 調査協力者一覧

協力者(性別)	外国人児童生徒の出身地域と性別、異文化接触があった時期
Aさん(男)	台湾(高校)、中国(高校)
Bさん(女)	フィリピン(高校)
Cさん(男)	トルコ・エジプト・バングラデシュ・欧州のある国、韓国(小学校)
Dさん(女)	ブラジル(幼稚園)、ブラジル(小学6年)、パプアニューギニア(高校)
Eさん(男)	フィリピン(小学校)、インドネシア(高校)
Fさん(男)	ブラジル(小学校)、マレーシア・モンゴル(高校)
Gさん(男)	台湾、フィリピン男子、フィリピン女子(高校)
Hさん(男)	ブラジル(小学校)
Iさん(男)	中国(小学校)、フィリピン(高校)
Jさん(男)	中国(中学校)

例えばAさんは、中国人生徒が怒っているように聞こえる話し方をしたり、掃除を真面目にしないなどの行為に当初は驚きながらも、「びっくりしなくなりました」「ちょっとだけですけど感情がわかるようになりました」「急に怒ったように最初聞こえたんですけど、あれは怒ってないんだなっていう感じで。伝えたいことを伝えているだけなんだなって」「大声は出さないでほしいですけど、もうそれが中国人なのかなって」と振り返っており、行動の違いに関して情意面での理解も進み、寛容な受け止めという認知を獲得するに至っていた。また、小学校でブラジル人の女子生徒と親しく交流をしたDさんは、その児童のことを「プラスのことを言うので心が広いと感じた」「あまり暗く考えない子」「よく笑う」「目の色がすごく綺麗だった」「日本から真逆の方向、遠い国から来てすごい」と振り返っており、彼女との異文化接触の結果、自分の性格も影響を受けて以前と比べて明るくなったと、内面的な変化について自己分析をしていた。また、Gさんは、高校で知り合ったフィリピン人の友人について、「1日中テンションが高い」「話してみると面白かった」「クラスのムードメーカー」と振り返っており、「毎日が異文化交流のよう」で「外国人に対して偏見を持つことは良いことではないと気づくことができた」「関わっていなければ英語は好きにはならなかった」などと語り、大学ではフィリピンで行われたボランティア活動に参加するなど、獲得した国際志向性を基にした積極的な行動がみられていた。

本研究の異文化接触事例の分析は、外国人児童生徒との接触に関する先行研究(林原, 2011)の結果を裏付けるものであった。子供時代の日常的な異文化接触により異文化の受容力がどのように培われていくのかや、多様な文化に対しての認知力や対応力がどのように身に付いて行くのかについて、具体的なプロセスの一端が明らかとなり、OECD(2018)の提唱するグローバルコンピテンス開発の道筋に関する示唆を得ることができた。外国人児童生徒を日本人児童生徒のグローバルな力の開発のための貴重な資源として捉え、どのように活かしていくかについて、今後更なる研究と知見の蓄積が待たれる。

<参考文献>

- 林原慎(2011) 小学校高学年の国際理解に関する興味・関心に影響を及ぼす要因—児童の異文化接触の経験からの検討 異文化間教育 33, 98-114.
- 文部科学省(2022) 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果の概要(速報)
https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt_kyokoku-000021406_01.pdf(2022年9月15日)
- 児島明(2007) ニューカマーの子どもと学校文化 勁草書房
- OECD(2018) Pisa 2018 Global Competence: what is global competence?
<http://www.oecd.org/pisa/pisa-2018-global-competence.htm> (2022年9月19日)